日本薬科大学
NIHON PHARMACEUTICAL UNIVERSITY

薬草園の花だより

第１２号

２０１８年（平成３０年）８月３０日発行

■第１２号に寄せて

観測史上初めてという６月中の梅雨明け後の伊奈町は連日の猛暑日。まさに異常な夏ですが、もう８月も末、やがて実りの秋を迎えようとしています。植物たちの一部も種子を実らせ始めました。学内では７月にあちこちで七夕飾りが見られましたが、薬用植物園では七夕の「本場」の仙台と同じ時期の８月初めを目処に飾り付けをしてみました。

この時期は、ちょうど子供たちが夏休みに入った頃ですから、かつての仙台市内の子供たちは子供会の班長の家に集まり、ひたすら素朴な七夕飾りを作ったことを思い出します。仙台市中心街の七夕飾りは大変に華麗かつ豪華なものですが、大きな吹流しと比べると小さくて目立たないものの、飾りには他に、紙衣、巾着、投網、折り鶴、短冊、屑篭がどこかに入っています。以上の７つの飾りが備わるのが仙台七夕の正式な飾りなのです。今回、七夕の時期を過ぎても名残り惜しく、飾ったままにしていましたら、タイからの留学生も見に来てくださったとのこと。これからも折に触れて色々な行事も取り入れたいと思います。是非、薬用植物園に足を運んでみてください。（船山）

薬用植物園の七夕飾り（温室の中央の部屋にて）

巾着

紙衣（前）

■今咲いています・見頃です

《スイレン》

スイレンはスイレン科スイレン属（*Nymphaea*）の多年草で、先に紹介したハス（*Nelumbo nuchifera*）と同じ科に属する多年草です。ハスの葉が水面上に茎を伸ばすのに対し、スイレンの葉は水面上に浮かびます。スイレンには熱帯性のものと温帯性（耐寒性）のものがありますが、今、温室で咲いているのは温帯性のものです。多くの品種があり、愛培されています。モネの一連のスイレンの絵は有名です。スイレンの仲間の植物として、わが国にはヒツジグサ（*Nymphaea tetragona* var. *angusta*）が自生しています。ヒツジグサという名前の由来は未の刻（午後２時頃）に花を開くためとされますが、実際には花を開く時間はまちまちであるとか。一方、スイレン（睡蓮）の名前は毎日夕方になるとその花を閉じることから名付けられました。

これらの植物に近縁のものにオオオニバス（*Victoria amazonica*）もあります。オオオニバスは世界最大の浮き草とも呼ばれます。

スイレン

《キキョウ》

キキョウ（*Platycodon grandiflorus*）はキキョウ科の多年生植物で、日本各地や朝鮮半島～中国東北部などに分布しています。その花は端正で、観賞用にも広く栽培されています。通常、青紫色の花をつけますが、白花もあり、またピンクの花をつけるシェルピンクという品種もあります。他、矮性のアポイギキョウなども知られています。

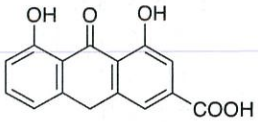
肥大化するその根をキキョウコンと称して薬用に供され、トリテルペノイドサポニン類を含み、去痰を目的に使用されます。サポニンには顕著な溶血作用がありますが、経口服用時の毒性は低いといわれます。８世紀に成立した万葉集に、山上憶良による秋の七草をうたった「萩の花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴朝がほの花」(巻八：１５３８)があります。

キキョウ

ここでの「朝がほ」はいわゆるアサガオではなくキキョウであるというのが現在の定説です。今、私たちが一般にアサガオと呼んでいる植物は８世紀末以降に遣唐使が大陸から薬用植物（その種子をけんごし（牽牛子））として持ち込んだとされるので、万葉集成立時にはわが国にまだ渡来していなかったと考えられるのもその理由のひとつです。

《ホソバセンナ》

温室でマメ科のホソバセンナ（*Senna alexandrina*／（旧）*Cassia angustifolia*）の花が咲いています。センナは葉を生薬として用います。世の中に「世界○大○○」という言い方があり、例えば世界四大お茶と言えば、紅茶と緑茶、コーヒー、ココアでしょうか。それぞれに原料となる植物もその原産地も異なるのに（紅茶と緑茶の原料植物は同じ）、共通のカフェイン系のアルカロイド類を持ちます。これらを見出したそれぞれの民族の能力に驚かされます。



レインアンスロン

ホソバセンナ

一方、世界三大下剤と言えるものがあり、それらは、センナ、ダイオウ、そして、アロエだと思います。これらもそれぞれ、原料となる植物が全く異なり産地も違うのですが、共通して、センノサイド類などのアントラキノン系化合物を含んでいるのですから、やはり、各地の人類がこれらを見出して来たことに驚かされます。図にはセンナ由来の化合物の最終的な瀉下活性本体とされるレインアンスロン（rhein anthrone）の化学構造を示します

■最近の他の植物写真から（３）

先に創刊号で紹介したインドジャボクが今年も温室で咲きました。この花の咲いた後の鮮やかな赤色はとても印象的です。また、今回のキキョウの項で紹介したアサガオも開花中。アサガオの様に初めは薬用植物として導入され、のちに園芸植物となったものは結構多いです。なお、カッコ内にＹＮとあるのは薬用植物園の野本有香さんの作品です。

一方、薬用植物園の外で見かけたこの時期ならではの花をいくつか紹介しましょう。ナツズイセンは夏水仙と書きます。ヒガンバナに近い植物で、真夏にピンクの花をつけます。また、ユウスゲのいかにも涼しげな花も見かけました。ユウスゲはニッコウキスゲに近い植物ですが、花茎を１５０cm ほども伸ばして、ニッコウキスゲよりも黄色味の強い花をつけます。また、カノコユリも咲いています。シーボルトがヨーロッパに持ち込んだこの花の美しさに彼の国の人々が夢中になったことがよく理解できます。

インドジャボク（ＹＮ）

アサガオ（ＹＮ）

ナツズイセン

ユウスゲ

カノコユリ

■薬用植物園からのお知らせ

《晩夏から秋の植物へ》

今、薬用植物園は夏の花の盛りとなっていますが、もう少しすると今度は秋の花々が咲き始めます。植物と付き合いながら過ごしていると、四季の移ろい、日本の四季の美しさがはっきりと感じられます。忙しい日常のひととき、是非、時間を見つけられ、薬用植物園にも足を運んでみませんか。

発行：日本薬科大学薬用植物園管理運営委員会
委員長（薬用植物園長）／船山信次
副委員長／山路誠一
委員（教員）／野口博司・西川由浩
新井一郎・糸数七重
委員（事務）／今村隆・笹井彰・鈴鹿和子
土屋翔太郎・佐藤智恵・黒木重夫
オブザーバー／野本有香（薬用植物園）